

地域振興に資する農業体験施設を備えた道の駅の計画

建築計画研究室 池下 昇也

(令和7年2月6日提出)

1. 研究の背景と目的

日本の農業は、伝統的な技術と多様な気候条件を活かし、地域ごとに特色ある作物が生産されてきた。しかし、食料供給の基盤を担ってきた農業は、現在多くの課題に直面している。近年、農業従事者数は減少傾向にあり、その要因として、農業従事者の高齢化や若者の農業離れが挙げられる。その結果、食料自給率の低下だけでなく、荒廃した農地や耕作放棄地の増加、さらには竹害などの問題が発生している。また、近年の食品衛生法改正により、より高度な衛生基準が設けられ、それに対応するための経済的な負担は大きく、設備投資が困難な農業従事者は厳しい経済状況に直面し、これが更なる農業従事者数の減少に加えて、道の駅で取り扱われる商品が一部減少するという問題も生じている。

そこで本研究では、このような農業に関連する課題に着目をするすることで、地元産の食品を守り、農業従事者数の減少問題を解決するきっかけとなる、農業体験施設や食品加工場を備えた道の駅を提案する。

2. 対象敷地

対象敷地を、令和7年度に徳島南部自動車道(立江榑渕-阿南間)が開通することにより、農地転用が可能となる徳島県小松島市榑渕町のインターチェンジの傍とする。それにより、多くの人々が訪れ、インターチェンジ周辺の地域資源を効果的に活用した道の駅の計画が可能になり、地域振興に大きな効果をもたらすと考える。

この場所は、周辺情報として、北側の農業協同組合が運営する産直市場や、四国八十八ヶ所霊場第19番札所立江寺がある。そのため、多くの巡礼者が本敷地の位置する遍路道で休憩や宿泊を行う。さらに、本敷地は山や田園、清らかな水源に囲まれており、自然豊かで多様な特産品がある。特に菌床栽培で育てられたしいたけは、日本国内でも屈指の生産量を誇り、その他にもお米やたけのこなどの特産品がある。

3. 地域資源に関する課題と提案

本敷地周辺は自然豊かで多くの地域資源がある一方で、これらの地域資源に関していくつかの課題が考えられる。本敷地の特産品であるしいたけの菌床栽培において、収穫後の廃菌床の処分方法が課題となっている。

また、農業人口の減少や高齢化に伴って、管理が不十分な竹林は放置竹林となり、竹の倒壊だけでなく、野生動物の住処になり農業被害につながるなどの竹害がおきている。これらのことから、適切な処理方法の確立や活用方法が求められている。他にも、宿主の高齢化や人手不足を背景に、四国八十八ヶ所の巡礼者が宿泊可能な、遍路道沿いの宿泊施設の減少が問題になっている。

敷地周辺の条件を踏まえ、本計画の対象者を道路利用者、観光客、四国八十八ヶ所の巡礼者、農業従事者とし、自然に囲まれ、農業に適した本敷地の利点を活かした農業体験施設を主体とし、農業や道の駅に関連する課題に対応した道の駅を提案する。

4. 道の駅の計画案

配置計画として、「メインエリア」、「キャンプエリア」、「温浴エリア」の3つに分割し、この3つのエリアを、農業体験ができる観光農園の水田を中心に、東にメインエリア、南にキャンプエリア、西に温浴エリアを配置した。中心の観光農園は、農業に興味を持つ人や、日ごろ農業に触れる機会が少ない市内の小学生などの遠足の場所として機能することで、農業に興味を持つきっかけとなり、若者の農業離れに貢献すると考える。

外構計画では、メインの駐車場をインターチェンジの傍に設け、運営

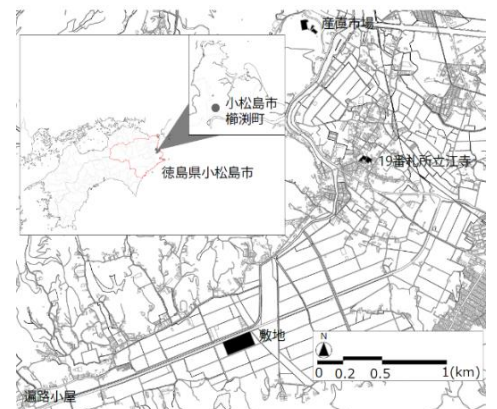


図1 対象敷地

スタッフの駐車場は西側に配置し、西側の裏動線からのアクセスとした。また、3つのエリアを結ぶようにアーケードを設け、天候に左右されずに屋外の人の移動を可能にした。さらに、北側に植栽を設けることで中心の観光農園に視線を集めるようにした。

(1) メインエリア

メインエリアは、駐車場から広場までの通り道を3つ設けた。3つの通りはそれぞれ、北側からチャレンジストリート、メインストリート、体験ストリートと称した。チャレンジストリートの共有キッチン、食品衛生法改正に対応して、農産物を活用した加工品の製造、新たな商品開発などの多様なニーズに応え、誰もが加工品製造にチャレンジできる施設とした。貸農園エリアは、利用者の用途によって選択できるように、12㎡、20㎡、30㎡の栽培スペースや、貸農園エリアの利用者が利用できる共有の農具倉庫を設けた。加工品販売所、飲食スペースでは、施設内の観光農園で収穫した野菜や米の提供に加え、共有キッチンで加工した商品の販売も可能にした。メインストリートには、道の駅の機能の一つである休憩機能の、24時間利用可能なトイレを設けた。トイレをメインエリアの中心に設けることで、メインエリアのどの施設からでも利用しやすい配置とした。そして、体験ストリートには、しいたけの収穫体験施設や、竹灯籠の体験施設を設けた。しいたけが収穫された後の廃菌床は、堆肥化やバイオマスボイラを備えた小型発電施設で燃料化し、各施設や観光農園、貸農園エリアで活用される。また、メインエリアの施設にはCLTを採用し、メインエリアの大屋根はランダムに開口を設けることで、採光を確保した。CLTの端材は、ベンチや子供たちの遊具として機能するCLT遊具として、広場やアーケードに配置した。

(2) 温浴エリア

受付をメインエリアと温浴エリアを結ぶ、観光農園内を通る中心の通りが見えるようにすることで、温浴施設に人を引き込むようにした。また、中心の観光農園が見渡せる外湯の傍に足湯を設けることで、外湯に入る人の声や温浴施設の音が自然に聞こえながら、中心の観光農園の水田の風景を楽しむことが出来るようにした。

(3) キャンプエリア

キャンプエリアには、観光客向けに、4から5人用の駐車スペースを設けたキャンプスペースや、宿主の高齢化や人手不足等により、四国八十八カ所の遍路道沿いにおける宿泊施設が減少している課題に対応するために、巡礼者向けの1から2人用のキャンプスペースを設けた。キャンプスペースの間に設けた観光農園の畑は、農業体験施設として機能し、収穫した食材は炊事場で調理したり、BBQの食材に使ったりすることができる。

5. まとめ

本計画では、本敷地周辺の地域資源を中心としたインターチェンジ近接型の道の駅について考えた。道の駅や地域が抱える課題を見つめ直して、道の駅の計画を行うことで、地域の観光資源や特産品を伝え続け、地域の魅力をより多くの人々に広めることができると考える。また、農業体験や各施設の活動を通じて、多くの人が農業に対する関心を深められる空間計画とすることは、よりよい地域や社会づくりのきっかけに繋がると考える。



図2 配置図兼平面図



図3 農業体験施設を備えた道の駅の様子